

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本の結婚式：タイの習慣と比較して
Author(s)	オラワン キーラティプラノン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1998 : 1 - 11
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039388">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039388</a>
Right	
Relation	



# 日本の結婚式

## —タイの習慣と比較して—

オラワン キーラティプラノン

### はじめに

私は、披露宴へ行くのに黒い衣服を着た日本人を初めて見た時、とてもびっくりしました。それは、私の国のタイでは披露宴へ行く時に黒い衣服を着てはいけないという習慣があるからです。それで、日本の結婚式に興味があつて、もっと知りたいなあと考えています。そして、現代の人間の生活の中で結婚式という儀礼は、一生の大事として、また 日常の交際としても 非常に大きな意味をもっています。ですから、一般的な日本の婚約と披露宴について書きます。そして、同時に、タイの婚約と披露宴も書いて比較しようと思います。

### 新しい形の婚約式

#### 婚約指輪で結納の代わり

日本では結納品の交換などという、普通の古い形式にこだわらず、もっと合理的で現代生活に合った婚約を、という方も多くなってきました。

確かに、帯料や袴料は別としても、その他の結納の品々は、名目だけのもので、実用価値は全くないといってよいでしょう。多分に縁起をかついだ、虚礼といわれてもしかたありません。

そこで、結納品は省略して、婚約指輪（エンゲージリング）と記念品の交換によって、結納に代えるという方法が普及してきています。

仲人と両家が集まるなり、仲人と男性本人とその両親が女性の家におもむくなりして、結納金を納めたのち、本人同士が婚約指輪と記念品を交換するのです。

交換が終わったら、一同で祝杯をあげ、食事をともにするという、虚礼を廃した新しい形式の婚約の仕方といえましょう。

タイの場合は、仲人がいません。男性とその両親が女性の家に行き、女性の両親に結納金を納めたのち、男性は女性に婚約指輪を贈ります。そして、一同で祝杯をあげ、食事をともにします。

#### 婚約パーティーを開いて

(2)

日本では婚約披露のためにパーティーを開くというのは、欧米の習慣ですが、この方法を取り入れて、結納の代わりにするものもだんだん多くなっています。

両家の両親はもとより、親戚や知人、先輩や友人などを招いて、カクテルパーティー風の軽い食べ物と飲み物でもてなし、仲人が「このたび、お二人はめでたく 婚約なされました」と挨拶をして、そのあと、婚約指輪を贈って、結納に代わる婚約の儀式とするものです。

タイの婚約も日本と似ています。しかし、仲人という点では違います。タイの場合は、両家の両親はもとより、親戚や知人、友人などの親しい人たちだけ招いてカクテルパーティー風の軽い食べ物と飲み物でもてなし、婚約指輪を贈ることで婚約の儀式とします。

### エンゲージリングは婚約のあかし

婚約指輪（エンゲージリング）を、男性から女性へ贈り、婚約のあかしにする、というのは、本来は欧米の習慣です。同じく欧米から伝わってきた結婚指輪（マリジリング）を贈る習慣は、我が国でもかなり前から定着していますが、このエンゲージリングを婚約のあかしに贈ることは、最近の流行といえるでしょう。

特に、従来の結納品というものが、実質のない形式的なものであるのに比べて、指輪は一生残るものであり、常に肌身離さずつけるものなので、二人の間の精神的なつながりを強めるうえにも、大きな効用があるところから、この婚約指輪を結納品代わりに贈ることが多くなりました。

これに対して、女性からは何も贈らなくてもかまいませんが、やはり婚約の記念に、と高級腕時計や宝石入りのネクタイピンとカフスボタンのセットなどを贈ったりする人も多くなっています。

タイの場合は 本来婚約指輪ではなくて、結納品を贈り、婚約のあかしにしたようですが、最近日本と同じように婚約指輪を男性から女性へ贈り、婚約のあかしにするようになりました。私は結納品より婚約指輪を贈る方がいいと思います。それはやはり指輪の方が一生残るものであり、常に肌身離さずつけるものなので、二人の間の精神的なつながりを強めるうえにも、大きな効用があるからです。

従来、女性から男性に何も贈らないのが一般的でしたが、最近婚約の記念として男性に腕時計などを贈ったりする人も増えているようです。

### 婚約指輪は左手の薬指に

婚約指輪を贈るときは、送り主が婚約者の左手を取って、その薬指にはめてあげます。結婚式に、結婚指輪も贈られることになっている時は、結婚式の当日、婚約指輪を右手の薬指に指しておき、結婚指輪を左手の薬指にはめてもらい、式の後、結婚指輪の上から同じ薬指にはめます。

日本では婚約指輪と結婚指輪をおくりますが、タイの場合は、結婚指輪を贈る習慣がありません。私は婚約指輪だけで十分だと思います。それは もし大切なものを二つも持っていたら、あまり大事にしないのでわないかと思うからです。やはり大切な物を一つだけ持っている方が大切にしたいと思います。

## 結納の時の服装

### 両家で同程度の服装を

結納の時の服装は、正式には、礼装となりますが、今では、略装にして差し支えありません。男性はグレーの背広に白いワイシャツ。女性は振り袖か訪問着。洋服ならいくらかドレスシーな物がよいでしょう。

両親や仲人もこれに準じますが、いずれにしても、両家でおなじ程度の服装にそろえるようにします。

タイの場合は 別に決まりはありませんが ほとんど男性はスーツ、女性はドレスを着ます。

## 結婚式の日取り

### ベストシーズン

結婚式場に行くと、普段気にしていなかった六輝表というものを見せられます。大安、仏滅などが書かれている表です。それに基づいて、日取りの説明をうけます。

日本は春夏秋冬の四つの季節があります。秋の収穫期と春の花咲くころ（十月、十一月、三月、四月）が最適です。

また、ジュンブライドという言葉が市民権を得、六月の結婚式が多くなっています。ヨーロッパでは、そのころがちょうど日本の春か秋の気候にあたり、過ごしやすいようです。そして、六月の花嫁は、幸せになるという言い伝えもあります。でもそれは、ヨーロッパの歴史と風土の中でのことです。

### 避けて欲しいシーズン

特別な理由があるにしても、八月中旬から九月にかけては避けて欲しいものです。猛暑・長雨・台風の季節です。なかでも、台風は交通機関を混乱させ、実際に交通機関の不通で、楽しみにしていた結婚式に参列できないケースがよくあるからです。

## 曜日と時間

日曜日のお昼時が一番いい時間に入ってきた理由は二つあります。

その一つは交通網の発達で、会場が便利なところであれば、よほど遠方からでも、朝家

(4)

を出て、結婚式に出席して、夜には家に帰れるからです。出席するものにとって、便利なようであり、難行を強いるものがあります。ついでにいうと、かつてのホテル難の時代には、式場からそのまま新婚旅行に出発するカップルが多かったようです。これが昼の披露宴普及の一因です。

もう一つの理由は、ホテルは宿泊と並んで宴会収入の比率が大きいです。とりわけ大口でありがたいお客は企業です。企業のパーティーは平日の夕刻となるため、結婚式を日曜日の昼に誘導することによって客の計画的配置を図ったというものですこれは式場サイドの理由です。

挙式の時間は、最もよいのが十一時か十二時頃で、挙式に引き続いて行われる披露宴が丁度昼食にあたって理想的です。

最近の結婚式が中途半端な時間に行われるようになったのには二つの理由があります。

一つは、参列者のうちの何人かが、遠隔地及び他の都道府県から参列します。そのため、その方々が朝ゆっくり家を出てその日のうちに自宅へ帰れる時間帯に設定するようになりました。その結果、中途半端な時間になってしまったのです。

もう一つは式場側の理由です。一日の稼働率を高めるために、中途半端な時間の披露宴が組み込まれただけの話です。

タイの場合は暦を見て自分で吉日を選びます。もしくは、お坊さんに生年月日による花婿と花嫁の運命によって吉日を選んでもらいます。それは、タイ人の中にお坊さんの選んでくれた時間に結婚式に限らず何かすると成功するという考えかたがあるからです。

挙式の時間は ほとんど午前中で、披露宴の時間は午後六時か七時頃です。

特に日曜日に結婚式を行う人々が多いようです。日曜日に行く理由は、お休みの日だからだと思えます。

## 花嫁の婚礼衣装

婚礼の衣装は今ほとんどの方が貸衣装を利用します。

花嫁の衣装は、挙式の時の式服と、お色直しの衣装とを用意しなければなりません。一般には、挙式の時に和装の打ち掛けで、お色直しで洋装のカクテルドレスやアフタヌーンドレスにする場合が多いようです。

挙式の衣装を洋装にする場合は、純白のウェディングドレスが正式です。そして、お色直しにはカクテルドレスなどにするのが正純ですが、これを振り袖などの和装にするケースが多いようです。

タイの場合は、婚礼の衣装はほとんどの方が貸衣装を利用します。

花嫁の衣装は挙式の時の式服と披露宴の時のドレスです。一般には挙式の時にタイの伝統的な衣装で、披露宴の時にウェディングドレスにします。タイの場合は お色直しとい

う習慣がありません。披露宴の時は始めから終わりまでウェディングドレスを着ます。

### 花婿の婚礼衣装

花婿の場合は、和装なら黒紋付きの羽織・袴が正装です。洋装ならモーニングコートになります。

男性は、本来、お色直しなどしなかったのですが、最近は男性もお色直しを行う場合が多くなりました。

花嫁の打掛に合わせて、挙式は羽織・袴で行い、花嫁が洋装のお色直しをするのに合わせて、明るい色調のスーツなどにお色直しするのが一般的です。

タイの場合は花婿も挙式の時にタイの伝統的な衣装で、披露宴の時はスーツを着ます。

### 媒酌人・両親・親族の衣装

一般的に、媒酌人はモーニングコートの洋装、媒酌人夫人黒江戸褌模様の和装というのが、一番普通です。

花婿が和装の場合など、媒酌人も黒紋付の羽織・袴の和装にすることはありますが、花嫁が洋装であるからといって、媒酌人夫人も洋装にすることはあまりありません。ただし、キリスト教結婚式などで、新郎新婦ともに洋装で、お色直しのない場合は、媒酌人夫人も洋装（イブニングドレスが正装）で差し支えありません。

両親の衣装は、父親はモーニングコート、母親は黒江戸褌模様が一般的です。

父親も、黒紋付の羽織・袴にしても差し支えありませんが、その場合、両家で相談しておかないと、片方が洋服では釣り合いがとれません。

伯父さん叔母さんにあたる人は両親に準じた服装となりますが、男性の場合は黒の略礼服が全体の釣り合いから望ましく、女性はやはり黒江戸褌模様が無難で、年が若い場合は色留袖の裾模様でもよいでしょう。

兄弟姉妹などの場合は、学生であれば制服、社会人なら黒の略礼服か地味な色のスーツ。未婚の女性は中振袖か訪問着。既婚者は色留袖か黒江戸褌模様です。

タイの場合は、両親・親族の衣装は別に決まりがありませんが、父親はほとんどスーツを着ます。

### 披露宴の服装

披露宴の服装で注意することは、花婿や花嫁よりも目立たないことと、披露宴の雰囲気に合わせてのことです。招待状に「平服で」と書いてあるときは、派手なドレスやタキシ-

(6)

ドを着ていくべきではありません。何も指定がない時は正装です。普段着で善くのは失礼です。

タイの場合で一番注意することは黒い服を着てはいけないということです。それはタイ人にとっては黒い色はよくない色で、お葬式の時に着るといふ考えがあるからです。ですから、結婚式の時黒い服を着てはいけません。それに対して日本の場合は結婚式の時にも黒い服を着るようです。

披露宴が始まるまで

### 席次はこのようにする

日本の場合はまず、メインテーブルには、向かって中央左側に新郎、右側に新婦、新郎の左側に媒酌人、新婦の右側に媒酌人夫人が着席します。

招待客側の席次は、メインテーブルに向かって、左側が新郎側、右側が新婦側となります。そして、メインテーブルの中央に近い席ほど上座で、左右に遠ざかるほど下座となります。

両親は、それぞれの側の末席に、父母の側で着席します。

タイの場合は、メインテーブルがありません。しかし、一番前にステージがあります。そして、席次が別に決まっています。しかし、ほとんど主賓や両親や親戚など、新郎新婦の親しい人たちが前のほうに座ります。しかも、タイ人は両親を大切にしているので、両親はステージに一番近い席に着席します。

タイは媒酌人はいませんが、主賓がいます。しかし、日本の場合は主賓は新郎新婦の勤めている会社の社長なのに対してタイの場合は社会で高い地位にある人や偉い人や有名な政治家などです。

### いろいろな披露宴の席次

日本の洋風の披露宴で、最も一般的なのが、メイン・テーブルを中心に、コの字型にテーブルを配置したものです。招待客が多くなると、テーブルを三列、五列と、増やして行き、それぞれ「松・竹・梅」あるいは「福・禄・寿・鶴・亀」といったように、テーブルに名札を立てて配置します。

和風の披露宴では、床の間を背に、新郎新婦と媒酌人が並びます。そして、それぞれ両側に、新郎側新婦側とコの字型に座るのですが、部屋の都合で媒酌人の隣に新郎側の主賓とそれに次ぐ来賓が媒酌人夫人の隣に新婦側の主賓とそれに続く来賓の方がそれぞれ何人かが座る場合もあります。

最近、人気のあるのが中華風の丸いテーブルです。もちろん、この円卓にも、それなりの上座下座があるのですが、洋式や和風の場合に比べて、上下の差があまりはっきりしな

いというのがその理由です。また、新郎側と新婦側との招待者の人数が違う場合でも、同じテーブルにどちらかの招待者が混ざっても、さほど不自然ではありません。従って、テーブルだけは中華風の円型にして、料理は洋食や和食というケースもあるほどです。

日本の場合はメイン・テーブルを中心に、コの字型にテーブルを配置したもので、「松・竹・梅」あるいは「福・禄・寿・鶴・亀」といったように、テーブルに名札を立てて配置するのに対して、タイの場合はメイン・テーブルのかわりにステージがあります。そして、テーブルに名札もありません。

タイで人気のある披露宴はやはり丸いテーブルやカクテル・パーティーです。誰がどこに座るのか別に決まりはありませんが両親や親戚や主賓などの大切な人は前の方に座ります。

### 席次で注意すること

日本の場合 席次が決まったら、これを一覧表にして、あらかじめ宴会の係員に渡しておきます。宴会場の方では、その席次表に従って、<〇〇様>と、それぞれの氏名を書いた席札を、当日、宴会場のそれぞれのテーブル上に置きます。

出席者は、テーブルの上に置かれた席札を見て、それぞれの席に着きます。

タイの場合は席次が決まっていないので、出席者が会場に入る時、自分の知っている人と一緒に座ったり、自由に好きな席に座ることができます。

### 受付から控室

日本では招待客は、普通の場合、受付に自分宛の招待状を差し出しますから、受付係は、これを受け取って、名簿と照合し、該当者の名前の上に〇印などを付けて出席者のチェックをすると共に、「恐れ入りますが、こちらへご署名をお願いいたします」といって、かたわらの<芳名帳>を示します。

出席者はお祝いを出して、芳名帳に名前と住所を書きます。

お祝いは現金で贈るのが一般的です。金額は新郎新婦との関係や社会的な地位によって違います。友人や同僚の披露宴なら1万円から3万円ぐらいです。お金は「のし袋」に入れて、披露宴の受け付けで渡します。品物を贈る場合は、結婚式の前に自宅に届けます。

受け付けの終わった招待客は、ひとまず控室に入って、披露宴の始まりを待ちます。控室では、おめでたい桜湯などで招待客をもてなします。

タイの場合は主席者は受け付けでお祝いのお金や品物を渡して、芳名帳に名前、住所とお祝いの言葉を書きます。そして、キーホルダーや小物などのかわいい結婚記念品をもらいます。

お祝いは現金で贈るのが一般的だという点は日本もタイも同じです。しかし、日本では



お金を「のし袋」に入れるのに対して、タイでは 自分宛の招待状に入れます。それに日本では受け付けが終わったら、ひとまず控え室に入って、披露宴の始まりを待つのにに対して、タイではすぐ披露宴の会場に入ることができます。

### 会場入口で招待客を迎える

日本では開宴の十分～十五分位前になったら、披露宴会場入口の金屏風の前に、新郎新婦に媒酌人夫妻、そして 両家の両親が一行に並んで、招待客を会場に迎え入れます。

並び方の順は、列の中央に、向かって左側に新郎、右側に新婦が並びます。そして、新郎の左側に媒酌人さらにその左側に新郎の父・母の順で並びます。一方、新婦の右側には媒酌人夫人が立ち、さらにその右側に新婦の父・母の順で、主催者側が横一列になって金屏風の前に並ぶのです。

招かれた客はそこに並んだ主催者たちに挨拶をして会場に入ります。

招待客の主催者側への挨拶は、まず新郎の父親の前に立ちどまり、新郎の父と母を等分に見て、「本日はまことにありがとうございます」といってお辞儀をし、次いで歩を進めて仲人の前に立ちどまり、新郎新婦と仲人夫妻を等分に見て、同じように挨拶をしてお辞儀をします。

次に、新郎新婦と仲人夫人の前を、会釈しつつ通過して、新婦の父親の前に行き、同じように都合三度、立ちどまって挨拶とお辞儀をするのが正式とされています。

招待客の全員が会場に入ったら、両家の両親は、係の案内で入場し、着席します。新郎新婦と媒酌人夫妻はその場に残ります

タイの場合は披露宴会場入口の前に、新郎新婦と両家の両親や兄弟が一行に並んで招待客を会場に迎え入れます。

並び方の順は、列の中央に向かって、左側に新郎、右側に新婦が並びます。そして、新郎の左側に両親や兄弟が並びます。そして、新婦の右側には新婦の両親や兄弟が立ち、主催者側が横一列になって並ぶのです。

日本の場合は招待客の主催者側への挨拶には順番がありますが、タイの場合は日本と違って、まず 新郎の父親と母親に挨拶するという順番などは別に決まっていません。ただし、招待客が会場に入る前にそこに並んだ主催者たちに挨拶するのはマナーだと思います。

### 披露宴はこのようにして行われる

開宴からお開きまでの時間は二時間から二時間半程度です。タイも日本と同じです。

#### 1 新郎新婦の入場

日本ではウェディングマーチが演奏されるなか、入口にスポットライトがあたり、やがて媒酌人を先頭に、新郎、媒酌人夫人に付き添われた新婦が入場してきます。

招待客のテーブルに通って、新郎新婦と媒酌人夫妻がメイン・テーブルに着くと、音楽はやみます。

タイではウェディングマーチが演奏されるなか、入口にスポットライトがあたり、やがて新郎新婦が腕を組んで入場し、ステージの上に着くと、音楽はやみます。

## 2 司会者が開宴を告げる

タイも日本と同じです。

## 3 媒酌人の挨拶

媒酌人は新郎新婦の経歴や人柄などを紹介する人です。

タイの場合は媒酌人はいません。そして、日本では経歴や人柄など新郎新婦のいろいろなことについて紹介する人は媒酌人なのに対して、タイでは司会者です。

## 4 主賓の挨拶が行われる

新郎側の主賓の挨拶が終わると、司会者は次に新婦側の主賓に対して祝辞を求め、これが終わると、次のウェディングケーキ入刀に移ります。

新郎新婦の紹介が終わったら、司会者が当日の主賓に対して祝辞を求めるという点はタイも日本も同じです。しかし、日本の場合は主賓は新郎新婦の勤めている会社の社長です。そして、主賓は新郎新婦から一人ずつ、合わせて二人います。一方タイの場合は主賓は社会で高い位置にある人や偉い人や有名な政治家などで、一人だけです。

## 5 ウェディングケーキにナイフを入れる

タイの場合はウェディングケーキ入刀は披露宴の一番最後のセレモニーです。

## 6 乾杯！そして祝宴の始まり

タイでは主賓の挨拶が終わると、主賓が音頭をとって乾杯をします。

## 7 お色直しと祝辞の再開

乾杯が終わると食事になりますが、新婦は、この時間を利用して、お色直しのために退場します。

やがて、新婦のお色直しの仕度ができると、媒酌人が入口まで新婦を迎え、新婦の手を取って入場します。

二人がそろったところで、祝辞が再開されます。

しばらくすると、新婦は二回目のお色直しのために席を立ちます。そして、少し遅れて、

新郎もお色直しのために退場します。

新郎新婦の仕度ができると、あらためて二人と一緒に入場しますが、この際最近ではキャンドルサービスがよく行われます。新郎新婦が、一つのキャンドルを二人で持って入場し、各テーブルのキャンドルに、その火を移しながら回り歩くというものです。

お色直しが終わると、再び祝辞となりますが、このころになると、新郎新婦の友人などの、くだけたユーモアや機知に富んだスピーチとなり、また、隠し芸や余興なども飛び出して、披露宴はひときは賑やかで楽しい雰囲気となります。

タイも乾杯が終わると食事になります。日本の場合、新婦は、この時間を利用して、お色直しのために退場するのに対してタイの場合は食事中に新郎新婦がスポットライトを浴びて、各テーブルで招待客と一緒に記念写真を撮ったり、挨拶をして歓談したりして回ります。

各テーブルを回り終わると、日本と同じように新郎新婦の友人などの、くだけたユーモアや機知に富んだスピーチとなり、また、隠し芸や余興なども飛び出して、披露宴はひときわ賑やかで楽しい雰囲気となります。

## 8 花束贈呈と両家代表の謝辞

祝辞や余興、そして祝電の披露などが終わると、いよいよ披露宴もお開きに近づきます。披露宴の最後のセレモニーは、花束贈呈と両家代表の謝辞です。

まず、司会者からの紹介があって、新郎新婦から、それぞれの両親へ感謝の花束が贈られます。新郎から新婦の母親へ、新婦から新郎の母親へ花束が手渡され、その一輪をそれぞれの父親の胸のポケットにさしてあげます。

花束の贈呈が終わると、その位置に、新郎新婦、両家の両親が整列し、まず新郎の父親が次いで新婦の父親が会場の媒酌人と来賓に対して謝辞を述べます。両家を代表して、新郎の父親だけが謝辞を述べる場合もあります。

タイの場合は披露宴の最後のセレモニーはウェディングケーキ入刀です。そして、花束贈呈もありません。しかし、花束贈呈はとってもいいと思います。それは、長い間面倒を見てくれた両親に心から感謝の気持ちを表すことができるからです。

おわりに

日本もタイも欧米や中国の影響を受けているから、日本とタイの文化の中には、やはり似ている点もあると思います。しかし、違う点ももちろんあります。それは、外国の影響を受けても、それぞれの国に入り込んだ文化は、自分の国にふさわしいように各地域ごとに独自に変化するからです。日本とタイの婚約と披露宴は全体的に同じです。しかし、具体的にはやはり少し違います。日本の方がタイよりしきたりや決まりが多いと思います。

いずれにせよ、人生の大変な結婚の習慣に関して、日本人もタイ人もお互いの国の文化が理解できたら、お互いの考え方や性格や習慣なども理解できるようになるのではないのでしょうか。それで、これからも日本とタイとの交流がさらに盛んになってほしいと思います。

#### 参考図書

- 1 綾部良一 「ふたりでつくる結婚式」 ブロンズ新社 1994年
- 2 監修武田七郎 「ビジネスマンのための冠婚葬祭辞典」 学研 1991年
- 3 誌田基与師 「いまどきウェディングじじょう平成結婚式縁起」 日本経済新聞社 1991年
- 4 宮川晴恭 「お見合・結納・結婚式の本」 金園社
- 5 日本語ジャーナル編集部 「日本生活事情」 アルク 1993年
- 6 川口マーン恵美 「国際結婚ナイショ話」 草思社 1997年